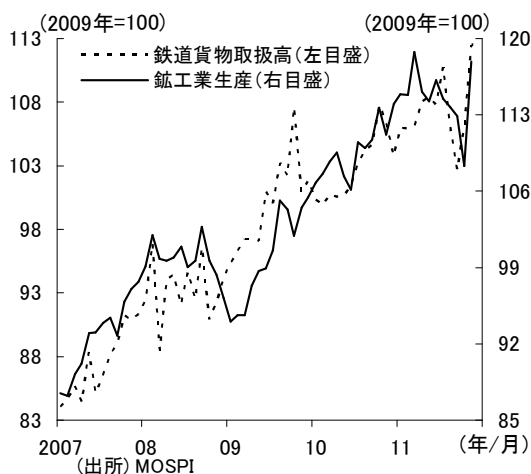


## 急回復したインド経済

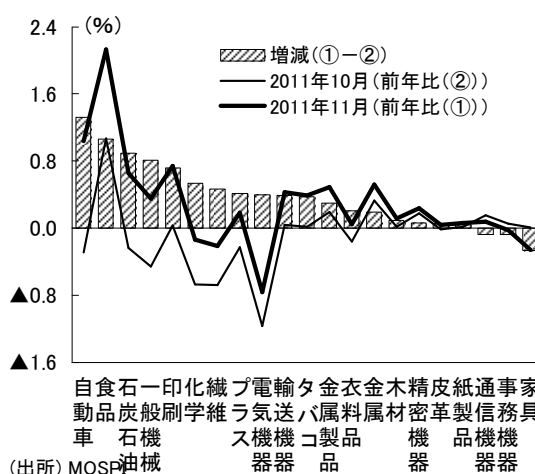
～ 生産がV字回復 ～

- (1) インド経済に回復の兆し。鉱工業生産は昨年3月をピークに月を追って減少（図表1）。10月は3月対比▲9%とほぼ1割減へ。しかし11月、前月比8.8%と大幅な反転増。もっとも本生産統計が発表された先週12日、ムンバイ株価指数は下落。昨春来、半年にわたって調整色が強まってきたなか、大幅増でも単月の動きだけでは先行き不透明感払拭に力不足の可能性。
- (2) しかし、今回の回復は短期に終息せず持続する公算大。まず前年比▲4.7%とマイナスに落ち込んだ10月と同5.9%と一転大幅プラスに転じた11月の鉱工業生産について業種別内訳をみると、とりわけ自動車の持ち直しが顕著（図表2）。次いで食品製造、石炭・石油製造、一般機械の順。素原材料から加工組立まで幅広い分野で回復の動き。
- (3) 次いで牽引役となった自動車について販売動向をみると、原動力は輸出向けでなく、国内販売（図表3）。輸出は10年末から11年春にかけて増加した後、ほぼ一進一退。それに対して、国内販売は昨年10月年率1,541万台まで落ち込んだ後、11月1,886万台、12月1,865万台と昨年9月までの1,600万台半ばの水準を大きく凌駕。背景には、一貫して所得・雇用環境の改善が続くなか、欧州危機などに伴い慎重化した消費者マインドの持ち直し。
- (4) 加えて、同国自動車市場の構造変化も看取。従来、増加は二輪車中心。さらに、昨年初までは三輪車需要も堅調。しかし昨年半ば以降、三輪車から商用車へのシフトが進行。一方、昨年11月から12月の販売動向では二輪車が弱含むなか乗用車が増加を牽引。地方圏にも四輪車需要が拡大。まず12月も好調続く自動車販売からみれば生産減の懸念小。さらに従来、鉱工業生産との連動性が高い貨物輸送量は一段増（図表1）、電力需要も大幅増に照らせば、生産回復持続の公算大。

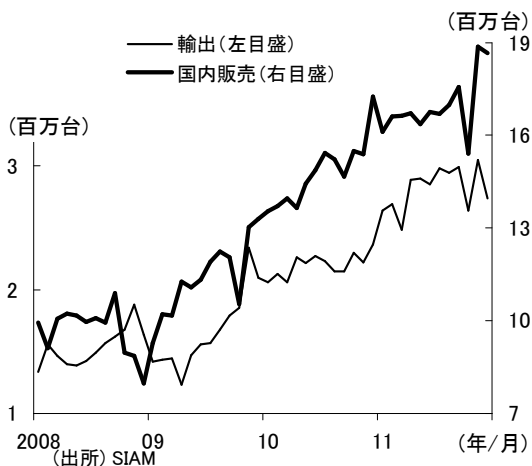
（図表1）インドの貨物取扱高と鉱工業生産（季調済）



（図表2）業種別鉱工業生産



（図表3）自動車輸出・国内販売台数（季調済年率）



（図表4）種類別自動車国内販売台数（季調済年率）

